

現代のこゝとば

やまだ
山田 玲子



私の場合、ふるさとの線路沿いの道を歩くと、みかんの花咲く丘の歌を思い出すことがある。意識の中で口ずさんだ瞬間、同じ場所の、幼い頃の風景が鮮烈によみがえる。そこを通る時、よく、この歌を母と一緒に歌っていた。母の歌声とともに、その頃の風景がありありと目に浮かぶ。

誰にでも、物事の記憶とともに鮮やかによみがえる歌や音楽、環境音があるだろう。祇園祭の囃子、蝉しぐれ、海鳴り…。

むしろ、音が久しく眠っていた記憶を呼び覚ますと言った方が適切かもしれない。私の研究対象である音声、すなわち、話し言葉も、歌や環境音と同じく、関連する事象の記憶と深く関わっている。よく知っている人の書いたものを読むと、その人の声まで聞こえてくるようだ。

音声について考えてみると、音の記憶が、多様な機能から成っていることがわかる。音声はコミュニケーションの手段とし

音の記憶

て、意味内容を伝えるという大切な役割を担う。意味内容を正しく伝えるには、話し手と聞き手が同じ言語体系の音声規則を持つ必要がある。話し手が「あ」と発したつもりの声を、聞き手が「あ」と認識できること、そして聞き手が「あ」と認識できる音声を、話し手が「あ」として発することができることが前提である。これは一見当たり前のようだが、外国語を学習する時に、この当たり前が通用しないことに気付く。

私たち日本人が英語を学ぶ時、日本語にない音にぶつかる大変な困難を味わう。記憶に存在しないから難しいのだ。そして、その困難が、単語や文の意味の理解の困難に連鎖していく。例えば、beach(砂浜)

という単語とpeach(桃)という単語を混同する人は少ないだろう。しかし、cloud(雲)とcrowd(人ごみ)は、覚えるのも難しく、一旦覚えた後でも混同しがちだ。これは、日本語の音声規則にBとPの区別は存在するが、RとLの区別は存在しないことによる。

音声規則や語彙や言語表現は、すべて私たち一人ひとりの記憶の中にある。音声とは、音声規則の記憶を基礎に、語彙や表現を重ね、話し手の声質や話し方の癖などの個人情報を加え、さらに、その時々々の背景情報とともに作り出されるものである。一方、聞き手は、こうした音声の持つ重層的な情報を、自分の知識体系のなかで理解し

解釈し、記憶に定着させる。こうして、音声を通じて、話し手と聞き手の記憶がつむがれていく。

人間の営みは記憶の上に成立している。音は間違いなくその記憶を豊かにしている。つらく折れそうになった時、純真無垢な心を持っていた頃の、将来への夢と希望に満ち溢れていた頃の音や音楽を思い出してみてはどうだろうか。先が見えずつらいことも多い世の中であるが、たったそれだけのことで心が浄化され、平静をとりもどし、明日への活力がわいてくるような気がする。私は単純すぎるのかも知れないが、
(ATRライティングテクノロジ
ー会長)